

稲植神社の祭について

松 井 義 雅

稲植神社は精華町大字植田小字上山百二十二番地に在る。長祿年間（二四五七―六〇）の勧請といい、中古衰微していたが、明治二年に再建された。「元祇園」と呼ばれ、明治以前には神宮寺として東福寺があつたといわれている。

稲植神社の辺りは、昔は雲を突くような大木の樹林であつたそうだ。菱田のほうから見て、丁度、植田の山に雲がかかると必ず大きな夕立がくるといわれたそうだ。

その名からも判るように、現在、南稲（約百二十軒）と植田（約八十軒）の氏子約二百軒で運営され、守り神として大勢の人たちに親しまれ崇められている。

なお、余談ではあるが、稲植神社の神紋は木瓜といわれ、胡瓜の花の額を表しており、これは古来、中国の方から渡来して来た紋で、日本では最古の神紋とされる。そのためかどうか、我が家にあつては先祖より滅多に「胡瓜」を栽培することが無い。神紋に似ているので勿体ない……と、いう事だつたと思う。

また、先祖からの習性で、神社に奉仕するものは食事においても牛馬などの家畜類や獣類は絶対に口にしては

ならないとされていた。先人たちはこの家訓を口が酸っぱくなるほど私に教えこんだものであった。
さて、今回はそんな「祇園さん」の祭について記してみよう。

それではまず初めに、稲植神社で現在行っている一年の行事を列記してみる。

- 一月一日 御神楽（午前一時〜）
- 元旦祭（午前十時〜）
- 一月四日 注連縄造り（午前九時〜）
- 一月六日 寒入御神楽（午後五時〜）
- 一月八日 御田植祭（午前八時三十分〜）
- 一月十四日 小正月御神楽（午後五時〜）
- 二月一日 月次祭（午前八時三十分〜）
- 二月三日 節分御神楽（午後四時〜）
- 二月十一日 祈年祭（午前十時〜）
- 三月一日 月次祭（午前八時三十分〜）
- 四月一日 月次祭（午前八時〜）
- 五月一日 月次祭（午前八時〜）
- 六月一日 月次祭（午前八時〜）
- 七月一日 月次祭（午前八時〜）



稲植神社

- 七月十四日 夏祭（午前十時〜）
- 八月一日 月次祭（午前七時三十分〜）
- 九月一日 月次祭（午前八時〜）
- 十月一日 月次祭（午前八時〜）
- 十月十六日 御神楽（午後五時〜）
- 十月十七日 神嘗祭（午前十時〜）
- 十一月一日 月次祭（午前八時〜）
- 十一月二十三日 新嘗祭（午前十時〜）
- 十二月一日 月次祭（午前八時三十分〜）
- 十二月十五日 割木作り・山草刈り（午後一時〜）
- 十二月二十九日 餅米洗い（午後一時〜）
- 十二月三十日 餅搗き（午前十時〜）
- 十二月三十一日 御神楽（午後八時〜）

以上が、昭和六十二年に実施した稲植神社の行事である。

こうして見てみると、よくもまあこれだけ多くの行事があるものだと感心する次第なのだが、これも地域の人たちの中で生まれ育った稲植神社が、人びとの暮らしの中に溶け込み親しまれ敬われている証拠だとありがたく再認識させられた。

それでは次に、前記した行事の中から主なものを選んで紹介してみよう。

『暮れから正月にかけて』

この時期は神社関係者にとつては、それはそれは多忙を極める毎日を送ることになる。十二月暮れから年明けの一月十五日までの間、かぞえ歳六十歳以上の氏子、宮守り、宗教者たちが総出で毎日のように午前九時ごろから午後四時半ぐらいに神社の社務所に集まつて来る。もちろん大人が集まるのだから酒盛りも一つの大きな楽しみではあるが、正月を迎えるにあたつての用意が大事な仕事となる。

まずは掃除である。境内はもとより広場、参道に至るまで美しく掃き清められる。門松をたて、赤土を撒き、庭の隅々まで美しくされる。

十二月十五日の割木作り・山草刈りも大切な仕事だ。これは正月用の柴になるのである。この柴は、境内の社務所の中で燃やして初詣の参拝者の人たちを温め、また、浄める大事な炎となる。大晦日の昼ごろから行われるこの大焚火は昔より決して絶やされたことがない。

以前は、十二月三十一日の午前零時になるかならないか、大焚火で暖を取り身を浄めた若者たちが、一斉に馬場洗い池に向かって走り出したものだ。これは、池で初泳ぎをし、そのあとで相撲を取ったからである。いわゆる相撲初めとし、昭和二十三年ごろまで行われていたが、残念なことに現在では行われてはいない。

私事になって恐縮だが、そんな訳で年末からの一週間程は自分の両親が皆自家に居ることがなかったことを思い出す。現在ならば電灯でスイッチ一つでこと足りるのだが当時は灯りを点けるために一カ所一カ所油を入れに

廻る作業も必要だったのである。

大晦日の宵参りが終わると一番詣、初詣と続く。

初詣には近辺の人たちはもちろん遠くからもたくさんの人たちが遣ってこられる。

社務所では御神酒を呑んだり唄ったりで、厳肅な年明けの行事の中にも楽しい雰囲気、新年を迎える喜びが溢れている。

一月四日には、六十歳以上の氏子が集まり「おしめはん綯い」が始まり、各家のしめ縄が綯われるのだ。

『七月十四日の夏祭』

「祇園さん」として親しまれている夏祭は、子どもにも大人にも楽しみな稲植神社の夏最大の行事である。

木津町の「祇園さん」は七月十五日、京都の「祇園祭」は七月十六日、十七日で稲植神社の「祇園さん」が一番早い。土地のものはこの三つを称し「三大祇園」と呼んでいるが、その関係については定かではない。

稲植神社の「祇園さん」は戦時中でも中止になることがなく現在に続いている。今はもちろん境内のあちこちに夜店が出て賑わうのだが、あの物の無かった戦時中でも玩具や金魚掬い、花火などの夜店が出ていたことをおもいだす。

そして、何よりも記しておかなければならないことは、争いや喧嘩が「祇園さん」の夏祭では、昔から一度も起きなかったということである。

これは稲植神社の神が争いを好まない性格なのかと語り草になっており、神事を司るものとしても誇りに思

う。

翌る日には、氏子が出て大掃除をし、夏本番を迎えるのである。

『御田植祭』

「御田のまつり」と呼ばれるこの神事は、五穀豊饒を願う人たちの一番の関心ごとである。

これは昔、この地が稲田村と呼ばれたように、稲作が盛んだったことと関係しているのだろう。最近では兼業農家が大方になってしまつてはいるが、それでも豊作祈願はやはり人びとの共通の願いなのだろう。

一月七日には神社の山から松の小枝を取つて来る。以前は沢山あつた松の木も最近では少なくなつて来ている。

取つて来た松の小枝の根元を半紙で包み、「案」（献撰机）に載せて、神前に供えるのだ。

翌る一月八日には、各氏子が稲植神社を参拝し、神前の案に供えられた松の小枝のお供えを四本ずつ各家に持ち帰るのである。

そして、持ち帰つた有り難い四本の松の小枝のお供えを、自分の家の田圃の苗代の四角に突き刺し、豊饒を祈るのである。

『神嘗祭』

御錠御扉に触るものは三日前から肉食を断ち、欲を断ち、神殿を浄め、掃き、拭き、磨くをなんども行う。

土地の氏神は各氏々を守る神であると同時に、稔りの秋の喜びをもにする神でもあった。従つて、第二次大戦前までは、秋の例祭の前日になると各氏子の家を一軒ずつ神饌物を集めに歩いたものだった。ある家では畦豆であり、また、柘榴であり鯉でもあった。それらの集めた物を「百芽寄せ^{ひやくめよ}」といい、例祭日「十月十七日」に献饌して、神とともに秋の収穫を喜ぶのを習わしとした。午後は奈良より大神楽を招んで獅子舞いや奇術などで氏子衆は楽しんだ。その後、神輿を担いで練り歩いて丸山まで行き、頂上に祀られている「四の宮神社」に参詣して帰つて来た。

今でもやはりその伝統は受け継がれており、神饌物を供え（海、川、山、田、畑で採れるもの）、神官が御扉を開け、宮司が一拝し、氏子が献饌物を手ぐりで供えるなど、祭礼は恭しくとり行われている。

以上、稲植神社の主な年中行事を説明したのであるが、この他にも年に四回の伊勢講があつたりして、行事は多忙を極める。

これはやはり稲植神社の祭礼が土地の人たちの生活の一部となつてしまつてしまつている証拠ではないかと思う。「祇園さん」がこれからも人々の心の中に消えることのない信仰心とともに、幾世代もの後まで親しまれ生き続けていくことを願ひ筆を置く。